

さい
れん
いん

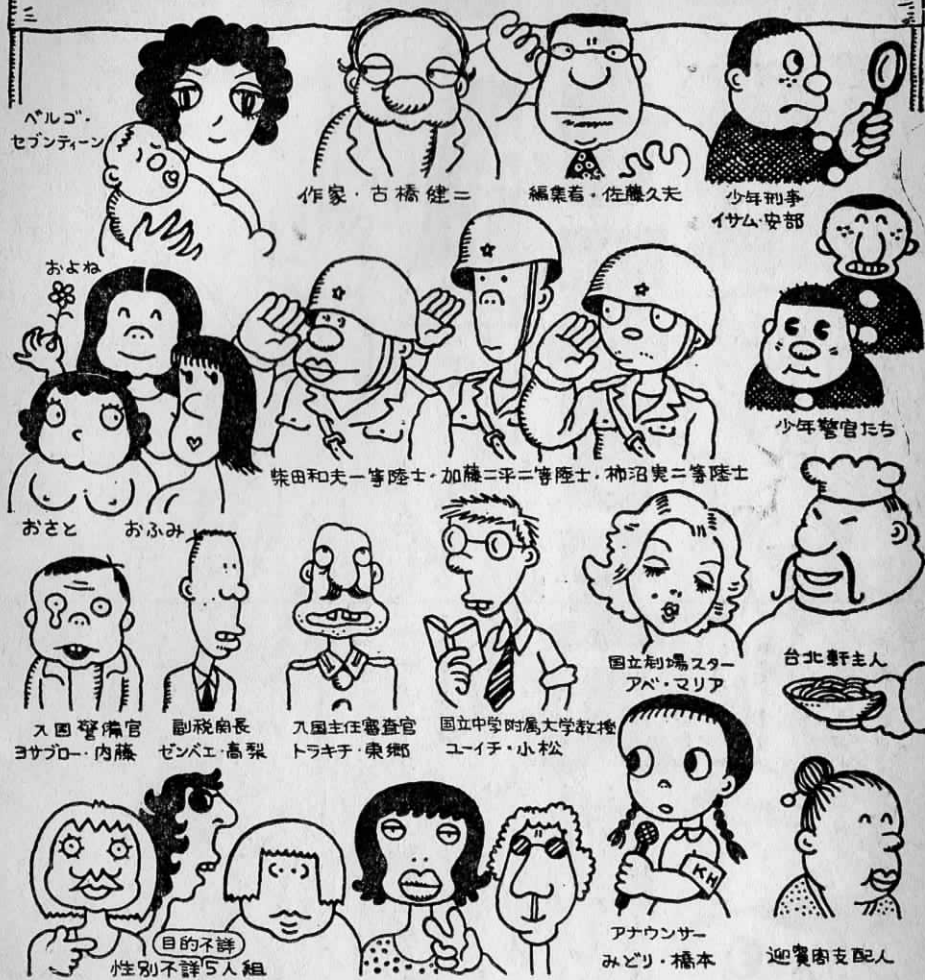
[5]

吉里吉里人

井上ひさし
絵・佐々木マキ



吉里吉里人・人別帖



前回まで――
上野発急行「十和田3号」に「吉里吉里人」と名乗る人々が乗りこみ、「おらだつは、今朝の六時に、日本国から分離独立したんでがす」と宣言し、乗客たちを入国者取容所まで連行した。「十和田3号」にまたま乗りあわせ、特別に入国許可を認められた作家・古橋健二・編集者佐藤久夫は、はじめは半信半疑だったが、様々なことを見るにつけ聞くにつけ、独立が思いつきでなく周到な準備と情熱をもつてなされたことを知った。佐藤はこの国のイエーン札が兌換銀行券であることに驚き、古橋は大朝日新聞からの原稿依頼に欣喜雀躍する。
日本国は「集団乱心事件」を鎮圧するために自衛隊を出動させた。だが、その様子を中継するTVの画面に突然爆破された戦車がかうし出された……

第五章

一個のピンポン玉っこが
広えアジャバ繋ぐのす

NHKの総合テレビの画面は、それからしばらくの間、濛々たる黒煙を吹き上げながら炎上する六一式戦車を写していた。その画面の外でNHKのアナウンサーがおろおろ声で騒ぎたてている。

「いったいこれはどういうことですか！ ぜんたい何事が起ったのですか？」
「わからん、わからん、自分にもさっぱりわからんのであります」

アナウンサーに負けず劣らずのおろおろ声は、戦車が火を吹く前までは、沈着な態度で終始しながら、きびきびとアナウンサーの質問に答えていた小隊長のものらしい。

「戦車を爆破して吉里吉里村へ脱走した柴田一士、加藤二士、そして柿沼二士の三隊員は、わが小隊に所属しておるのであります。日ごろはごくごく真面目な青年でありました。そ

れがまた急になぜこのような大それたことを……。わかりません。なにがなんだか見当もつきません」
と、突然、画面が炎上する六一式戦車から、ゆっくりと回転する水色のガラスのパネルの絵に切り換った。ガラスのパネルの上に『女性手帳』という、洒落た手書のタイトルが浮かびあがる。音声の方もアナウンサーと小隊長のおろおろ声の二重唱から、ピアノを中心にした小編成の楽団の、のどかな感じのテーマ音楽に変った。戦車炎上という打合せにない椿事が発生したせいで、NHKは『吉里吉里村・集団乱心事件』の実況中継を中止し、急いで代替番組の放映を開始したらしいのである。

「すばらしい変り身の早さだ。とっさの間に情況のすべてを判断し、実況の現場からスタジオへバトンを渡すとは、まるで神業ではないか」

日本国の売れない大衆小説家の古橋健二は指の股に挟んだハイライトでテレビの画面を指した。

「ところで佐藤君、わたしはこの『女性手帳』に出演したことがあるのだよ。それでいま喋っている杉沢陽太郎アナウンサーとも満更知らない仲でもないのさ。彼はなかなかの好人物でね、打合せのときに、NHKの五階食堂でわたしにチャーシュー麵を御馳走してくれたよ。それも番組接待費ではなく、自腹を切ってた。しかしさすがはNHKだねえ、チャー

シューの厚さが五耗もあったのだよ」

古橋は指の股の間に挟んでいたハイライトの筒をすこし押し潰して五耗の厚さにし、それをこられた売れ行きのよくない月刊誌『旅と歴史』の編集者である佐藤久夫の目の前に掲げてみせた。

「ちょうどこれぐらいの厚さだったかな」

「この近くで戦車が燃えているというのになにを平和なことをおっしゃっているんですか」

佐藤は眼前の古橋の手を勢いよく払った。

「戦車に火をつけられて立腹した自衛隊がいつ第二段階の毒雲形成作戦を展開してこないとも限らないのに、よくもまあ暢気にチャーシューのはなしなぞできますね。さっきの小隊長もはつきり言っていたでしょう、第一段階が加農砲による威嚇、そしてその次に毒ガスを撒布して吉里吉里人を燻製にする、と。つまり、先生、わたしはいつスモークド・サーモンならぬスモークド・マンにされるかわからない運命にあるんですよ。いわば今は非常時ですぜ」

「非常時、すなわち戦争も、日常時である平和も、つまるところは同質のものなのだ」

古橋はすこし怒った語勢になった。

「トルストイの『戦争と平和』、あの歴大な作品を支えている主題は、じつにこの数十語に尽きる。したがってトルスト

イの論法を借りていうならば、平和時のチャーシューの厚さ

について云々するのも、戦時の戦車の装甲板の厚さについて喋々するのも、同じ価値を有するのだ。決してチャーシューを軽んじてはならぬ。チャーシューを喰うものはやがていつか思いもかけないことでチャーシューに泣くことになるだろう」

「す、すると先生はトルストイの『戦争と平和』をお読みになったことがあるのですか？」

佐藤は眼鏡の奥で目玉を引ん剝いた。

「あの長ったらしい小説を読んでいらっしやったのですか？」

じつをいえば古橋は書店の店頭で一度だけ『戦争と平和』を手にしたことがあるに過ぎない。ばらばらと頁風を立ててから、巻末の解説を斜めに読み、そのうちに重くて手首がぐたびれてきたので、書架に戻した。彼と『戦争と平和』とのつきあいは後にも先にもこれだけだが、そのとき解説で見た一行をふと思ひ出し、口に出しただけのはなしである。しかしそれを正直に告白するのも憚られ、古橋は佐藤に向って暖然と頷き、味々然と微笑してみせた。

「そうでしたか。もうお読みになっていたのでですか」

佐藤はしきりに頷く。

「さすがは作家だっちゃ、よく勉強して居るもんだっちゃ

ね」

吉里吉里国立中学校附属大学外国語学部日本語学科教授という長い肩書を持つユーイチ・小松も佐藤に同調して何度も首を縦に振った。

「おらもえづがあげな大作ば吉里吉里語さ翻譯してえもんだねす」

「それにしても事件はその後、どのような進展をとげているのだろうかしらん」

古橋は話題が『戦争と平和』の内容に及ぶことをおそれて、大急ぎで話題を転じた。

「日本国は次にどういう手で押してくるのだろうか。やはり毒雲形成作戦だろうかねえ」

「さあてね」

ユーイチ・小松は首を傾げながらビール瓶の注いであるコップを口に近づけたが、ふいにそのコップを、椅子に馬乗りに跨って天井を睨み、煙草をふかしながら何か考え込んでいる風の台北軒の主人に向って突き出した。

「吉里吉里テレビで何が情報っことば流しているかもわからぬ。

ご主人よ、チャンネルばUHFさ廻して呉ねるか？」

「あいイ」

煙草を床に投げ捨てて立ち上った台北軒の主人がテレビのチャンネルをUHFに合せた。

「……ば爆破すて祖國さ帰還すた柴田、加藤、柿沼の三勇士は、只今、吉里吉里人民の圧倒的な歓呼の聲さ迎えられて、吉里吉里地熱発電所前ばパレード中だっちゃ」

画面では、『吉里吉里放送協会』の腕章をした少女が喋っていた。

「あ、みどり・橋本アナウンサーだっちゃ」

ユーイチ・小松教授が画面に向って手を振った。

「吉里吉里放送協会にはす、少年アナウンサーが三人、少女アナウンサーが四人、居るけんど、一番人気はこのみどり・橋本す。吉里吉里国会の議員さ立候補すたら、まんず最高点当選は確実だっべね。吉里吉里では小学校さ入えれば国会議員さ立づ資格があつから、次の選挙には立候補すつかも知んね」

みどり・橋本は手に持っていたパターンを、自分の胸の前に掲げた。

「さて、おらが爆破三勇士の凱旋パレードの道順だども、一分後に石切後、三分後に桜公園、四分後にダリア公園、六分後に吉里吉里国営食堂前、そんで八分後に入国者収容所前ば通る予定だっちゃ。お手すきの人はみな道さ出はっておらが三勇士の帰還は手振って迎えて呉さいね。なお、このパレードの終点は駅前前の国立迎賓閣す。三勇士は夕方まで迎賓閣で御休憩。んで、夜八時から開かれる国立大劇場での凱旋報告

会さ臨まれる事になってんだっちゃ。凱旋報告についての詳しい事は午後五時の定時ニュースの時間に喋る事になってるす。ほんじゃまたね。さえなら三角、また来て四角、四角は豆腐、豆腐は白え、白えは兎、兎はぶっ跳ねる……」

みどり・橋本アナウンサーは歌いながらスキップし、画面から出て行ってしまった。空白の画面に『臨時ニュースはこれで終』というテロップが現われた。台北軒の主人は手を伸してテレビのスイッチを切った。

「古橋先生、爆破三勇士とはなかなかおもしろいじゃありませんか」

佐藤が古橋の耳許に口を寄せてきた。

「なんとなくこう心がそられますぜ」

「うむ」

古橋も相槌を打つ。

「そういえばわたしの幼いころにも爆弾三勇士というのがあった」

「らしいですな。そこでどうでしょう、爆破三勇士と先生との会見というのは？」

「会見だと？」

「ええ、先生に爆破三勇士と会っていただく。そして自衛隊員である彼等がなぜ友軍の戦車を爆破したのか、そしてまたなぜ吉里吉里村に逃げ込んだのか、それを先生の鋭い質問の

矢で容赦なくほじくっていただく」

先生の鋭い質問の矢、という佐藤の表現が気に入って古橋は思わずにやりとした。

「それできみはわたしと三勇士の会見記を『旅と歴史』誌上に掲載しようというのだな？」

「凶星ですよ、先生」

佐藤はぼちん！と指を鳴らした。

「表紙に『特別掲載・独占会見記』と刷り込みます。洛陽の紙価を高からしめるだろことは今から請け合いますがね」

洛陽の紙価を高からしめる、という佐藤の言いまわしがまたも気に入って古橋はうふふと笑った。

「先生の独占会見記を掲載した次号は、ひょっとすると、雑誌には珍しく、増刷ということになるかもしれませんよ、先生」

佐藤の放った増刷という言葉がさらに嬉しくて、古橋はだらりとだらしなく頬の肉をゆるめた。

「先生のインタビュー技術に驚嘆する連中がきつと出てくるはずですよ。どこかの週刊誌が対談のホストに指名してくるかもしれませんね」

指名という言葉がいつそう喜ばしくて、古橋は後方へ五度ほど躡を反らせた。

「ホストなら一回五万円、しかも毎週ですから月に二十万円

にはなりましような」

月に二十万円、という一句がいやが上にも心に楽しく響いて、古橋はさらに後方へもう十度ほど躡を傾けた。

「ただし一割は税金天引きで手取りは十八万円ですがね」

一割は税金、と聞いてすこし不愉快になり、古橋は二度ほど前方へ上体を戻した。

「先生のお好きなNHKあたりが特別インタビューアとして起用するかもしれませんね」

NHKの特別インタビューアと考えただけでも誇らしく、古橋の上体は、これまでの累積傾斜角度十三度に新たにまた三十五度を加えて後方に反った。

「そうになったら、先生、いったいどうします？」

ほんとうにどうしよう、とうきりきして悩みながら、古橋はさらに五度ほど反ったりかえったが、胸の反りを腹筋が支え切れず、彼は肩から混濁土の床に叩き落ちた。普段の古橋なら、ぎゃつと喚きのうんうん呻きのぶつぶつばやきで、数分間は起き上れないでいるところだが、今回は心がゴムマリのように弾んでいるから、さほど痛みは応えない。それどころか顔に笑みを残しながら弾むように立ち上って、

「佐藤君、引き受けたよ。いかにもわたしは爆破三勇士と会見しようじゃないか」

と言った。

「そうこなくちゃ嘘です」

佐藤は右手の親指と人差し指で環をこしらえて示しながら、古橋に片目をつむってみせた。

「加農砲による威嚇射撃は途中で戦車炎上というハプニングがあつて多少すこけましたがね、日本国はこのまま引き下りはしませんぞ、先生。すぐに第二段階の毒雲形成作戦というのを仕掛けてきますよ。そうになったら吉里吉里村もお手あげでしょう。白旗掲げて降参するところでこの事件もお仕舞い。となると先生の独占会見記はますます値打が出ます」

言いながら佐藤は傍らのユイイチ・小松の方に向きをかえたい肩書にふさわしくない音高きおくびを連発しながら、黙々とビールを胃に流し込んでいた。

「小松先生、吉里吉里の要人と会見するにはきつと複雑怪奇な手続が要るんでしような」

「ゴントロー・五十嵐大統領さ会見するときにはちょっと面倒だっちゃね」

ユイイチ・小松は口の端のビールの泡を手の甲で拭いながら覚束ない酔眼で佐藤を見据えた。

「なにする大統領は忙しいがね。だども、あどの人だちは割かず簡単よ」

「例の爆破三勇士だがね、彼等に至急会いたいのだ。出来れ

ば今日中に、だ。先生の顔でなんとかならないだろうか。お礼と言ってはなんだが、『旅と歴史』を一年間、無料で送りさせていただく……」

このとき、遠くから哀々切々たる旋律を奏する鼓笛の響きが聞えてきた。古橋は『月が出た出た』という常盤炭坑節を歌うと、それが途中でいつの間にか『出た出た月が……』という小学唱歌になってしまふような音痴ではあるが、その旋律には聞き覚えがあった。

(……うむ？ あれはどうやら、今朝、入国者収容所で耳にした吉里吉里国歌……)

と耳を澄ます。鼓笛の音に合わせて歌う声も近づいてくる。

吉里吉里人は眼はア静がで
鼻筋と心はア真つ直ぐで

顎と志はア堅くて
唇と礼儀はア厚えんだちや

たしかに吉里吉里国歌である。

その旋律に心を誘われて腰を浮かせていた古橋は、一足先に外に出ていた台北軒の主人の、

「あいイ、爆破三勇士の凱旋パレードがこっちへやってくるねえ！」

と思いつながら古橋は目の前を通り過ぎて行く凱旋パレードを眺めていた。

「よう、みんな、大手柄だったっちゃね」

三勇士にユーイチ・小松が手を振った。

「おら、テレビでお前達の働き振れば拜ませえでもらったよ」

「こりやまんず、新田のユーイチちゃでねえが……」

先頭の、部厚い唇を持つ青年が眼玉を真丸にした。彼の自転車のハンドルには、

『吉里吉里人民軍参謀総長 カズオ・柴田將軍』

と書いた板切れがぶらさがっていた。

「戦車さ手榴弾ば投げただけで、陸上自衛隊の一等陸士がら吉里吉里軍の將軍に出世しちまったのす。申す訳ねえのう」

と、元一等陸士で今將軍の柴田が頭をかいた。ユーイチ・小松は柴田將軍の肩を叩きながら、

「なに申す訳ねえごだ無。それだけの働ぎばしたんだがら出世して当然す」

と言いつ、それから將軍の車の荷台を支えている鳩胸出尻の娘に、

「およねさあ、あんたもそのうち將軍閣下の夫人様つうごとなるべ。なじょにもまあ、ええ男ば摺んだもんだねす」
と冷やかしが半分、祝福が半分の調子で声をかけた。

という声に弾かれるように立って、店の外へ飛び出した。佐藤がそれに続き、ユーイチ・小松がふらふらしながら佐藤の後を追う。

鼓笛隊はいずれも小学生でその数はざっと十五名。全員少女で、胸に『吉里吉里国立鼓笛交響楽隊』と記した襷を肩にかけていた。鼓笛交響楽隊の後に、吉里吉里国の国旗である赤蜘蛛の小さな紙旗を掲げた少年たちが、二十名ばかり、『吉里吉里少年合唱隊』という襷を少女たちと同じように肩にかけ、甲高い声で歌いながら続いていた。

爆破三勇士は少年合唱隊のうしろにいた。三人とも自転車に跨っている。自転車の後方には一台に一人ずつ若い娘がついていて、荷台をしっかりと両手で押えていた。パレードの進行速度は歩くときの速さと同じである。これは自転車には苦手な速度だ。どっちな倒れてしまふ。娘たちの役目はどうやらそれを防ぐことにあるようだった。

爆破三勇士は、数米に一回ぐらいの割合でポケットに右手を突っ込み、すぐにそれを抜いて宙に高々と差しあげる、という奇妙な動作を繰り返していた。そのたびに彼等の頭上に白い紙切れが、あるときは蝶のようにひらひらと、またあるときは白い花びらのようにはらはらと舞った。三勇士は自前で紙吹雪を撒いているのだった。

(……きつと人手不足なのだろう)

「恥すいながら囃さねて呉で……」

ユーイチ・小松におよねと呼ばれた娘は頬を赤くしながら荷台を支えている。

「ニヘイとミノル、おめえらは自衛隊の二等陸士がら吉里吉里人民軍の第一師団長と第二師団長さなつたつうわけだな……」

ユーイチ・小松は加藤と柿沼の乗る自転車のハンドルに下っている板切れを見ながら言った。

「おめえらもえらい出世したもんだっちゃ」

「うん、だどもユーイチちゃも今じゃ大学教授つう話でねえすか」

と、『吉里吉里人民軍第一師団長 ニヘイ・加藤將軍』なる板切れの下った自転車に跨っていた馬面の青年がユーイチ・小松に言った。

「なにになに、大学教授つたつて、いまんどこ、教しえでる大学生はひとりも居ねえのす」

「ほんじゃ、おら達と同じでねえすか」

と、ひょっとここの青年が話に割って入る。ハンドルに下った板切れによればこのひょっとここの青年が吉里吉里人民軍第二師団長のミノル・柿沼將軍らしい。

「おら達は師団長とは言っても今んどこ、部下は一人も居ねのっしや」

「こげなどで立話されても困んなあ」

と、ニヘイ・加藤將軍の車の荷台を支えていた娘が不平を鳴した。娘はまるまると肥った餅肌持主である。

「この凱旋パレードは分刻みのスケジュールで運行されてんだがらねす」

「あ、こりやおさとちや、悪かったなす」

ユーイチ・小松は餅肌娘に軽く叩頭した。

「ただちよっと急な話ばあんのっす。あと三十秒、未来の旦那様がだど話っこさしえで呉ろ」

「話って何だべす？」

と、ミノル・柿沼將軍の荷台を支えていた小柄な娘がユーイチ・小松に訊いた。ユーイチ・小松はその小柄な娘に古橋を指し示しながら言った。

「おふみちや、あの人ば知ってっか？」

「おら知らね」

「古橋健二つうお人だちや。それでも判ん無が？」

「おら、判んね」

「日本国の小説家だちや」

「それがどうした言うの？」

「爆破三勇士さインタビューばしてえんだどっしや」

「インタビュー言うど？」

「種えると聞きでえんだど。で、そのインタビューば『旅と

歴史』言う雑誌さ載っけでえそうだ。およねさにおさとさに

おふみちや、どうだべ、未来の旦那様がだど国立迎賓閣さ着いたら、三十分だけ古橋先生さ貸して呉ねべが？」

三人娘が揃って怖い顔になった。

「あいや、なんでそげに怖ねえ顔ばすんのっす？」

「決まってんでねえすか」

と、カズオ・柴田將軍の車の荷台を支えていたおよねとい

う娘が言った。

「おらだは二ヶ月振りに逢ったんよ。迎賓閣さ入ったらば、それぞれ座敷さ籠もってす、ひっしひっしと抱き合えてえで

ば！」

「そごだよ」

「なにがそごだべ？」

「なにも汗臭せえ躰で抱き合うごだ無えべ。三十分かげであんな達は風呂さ入って躰ば磨け。んで、次の三十分で未来の旦那様がだど風呂さ入える。その間にあんな達は湯上り化粧をし、ビールの用意ばする。旦那様がだど風呂がら出はってきたらビールで乾杯の、抱き合うの、キスするの、どごが良え所さ触るの、あとは勝手す。ま、悪いいごだ言わね。清潔な躰で抱き合った方がええよ、うん？」

「ええ、ユーイチ・小松先生のおっしゃったことにわたしも同感ですな」

佐藤がべこべこ叩頭しながら三勇士と二人娘に近づいた。

ユーイチ・小松と三人娘との会話の間に用意していたのだから、ポケットの中の名刺や鼻紙を細かく千切ったものを、佐藤は三勇士の頭上に万遍なく撒き散らして紙吹雪を降らせながら、

「わたくし『旅と歴史』編集部の佐藤久夫と申すものですが、インタビュー謝礼はぐんと奮発させていただきますので、いかがでしょう、あなたがたの婚約者の三將軍をほんのちよっとお貸しいただきませんか？」

と猫撫で声で口説いた。だが、三人娘は牡蠣のように押し黙って佐藤を睨んでいるばかりである。

「むろん、興味本位でインタビューをお願いしているのではありませんよ」

佐藤は紙吹雪を降らせながら押しに押す。

「なぜ独立か、なぜ戦車爆破か、日本国に対してなにが不満か、日本国と和解するおつもりはあるのか、あるとすればその条件はなにか、そして独立を通して世界になにを訴えようとなさっているのかなど、なんでも結構、テーマの選択は三將軍のご希望にまかせます。つまり、歴史への証言、これを『旅と歴史』という雑誌を充分に利用して行なっていたいただきたいわけですか」

「歴史への証言だど？」

と、カズオ・柴田將軍が訊いた。

「あんだ、すこしお追従が過ぎるんでねえの」

「わたくしはお追従とお通夜は嫌いな男です」

佐藤は大きな声を出した。少女鼓笛隊や少年合唱隊がびっくりして振り返るほどの大声だった。

「三將軍ともその渦中においてになるから、ご自分ではお気付きになっておられぬと思いますが、よろしいですか、三將軍ともすでに歴史的人物になっていらっしやるのですぞ。いや、歴史的人物という言い方すら生温い。あなたがた三將軍は歴史そのものでいらっしやる。もうひとついうならば、歴史が服を着て自転車に乗っておられるようなものです」

佐藤はここで三人娘のひとりひとりをゆっくりと指さしてさらに高々と声を張りあげた。

「そして貴女がたは、歴史を自転車に乗せて押しておられるのです」

三人娘はそれぞれの手を自転車の荷台から離し、異口同音に、

「おら、恥すい！」

と眩きながらその手で顔を覆った。とたんに支え手を失った三台の自転車が横倒しになり、鞍上の歴史たちは地上に転げ落ちた。

十分後、国立迎賓閣二階の『博愛の間』で古橋は三勇士たちに対して次の如きインタビュを試みていた。なお、三人娘は階下の湯殿へ汗を流しに行き、ユイチ・小松はすっかり酔って隣りの『平等の間』で横になっていたから、インタビュの冒頭に居合せたのは、古橋、三勇士、そして佐藤の五人である。

——あなたがた三人は史上最も若い將軍だと思われるが、最初に正確な年齢をお伺いしたい。

柴田 おれ、満二十一歳。

加藤 おれ、満十九歳。

柿沼 おれも満十九歳。

——（古橋には加藤と柿沼の「満十九歳」がはじめは「饅頭臭い」と聞えたが、すぐにそれが自分の聞き間違いと気づき、ひとりで赤面しながら次の質問にかかった）三將軍の最終出身校は？

柴田 俺達は三人とも県立若柳高校は卒業したんだっっちゃ。只、おれは加藤と柿沼の二年先輩だけっとも。

——なぜ、自衛隊に進まれたのです？

柴田 はじめは自衛隊さ行く気などさらさらながったんだっっちゃ。高校三年の時、大学はどこさ受験すべかなあと思っで種えろ調べたら、東北大も山形大も福島大も岩手大も秋田大も弘前大もどこもかこもみな毎年、定員以上の受験者が集まってるのっしや。たったひとつ定員以下なのは自衛隊だ

ったのです。

——すると、失礼だが、成績があまりよくなかったのですな。そこで競争率がコンマ以下の自衛隊を選ばれたわけだ。なかに、学校の成績ぐらいあてにならないものはありませんよ。このわたしも高校時代は三百人中の二百八十番あたりを浮き沈みしておりました。しかしそのわたしがいまや大朝日の寄稿家ですから、わからんもんです、アハハ。

柴田 んで無。俺達は三人とも成績は抜群だったっっちゃ。——おれ、三年の三学期には二百人中十五番。

加藤 おれ、十八番。

柿沼 おれ、二十一番。

——ではなぜ自衛隊で？

柴田 ンだから、毎年毎年、競争率が〇・八倍だの〇・九倍だの言う自衛隊が可哀想になったのっしや。

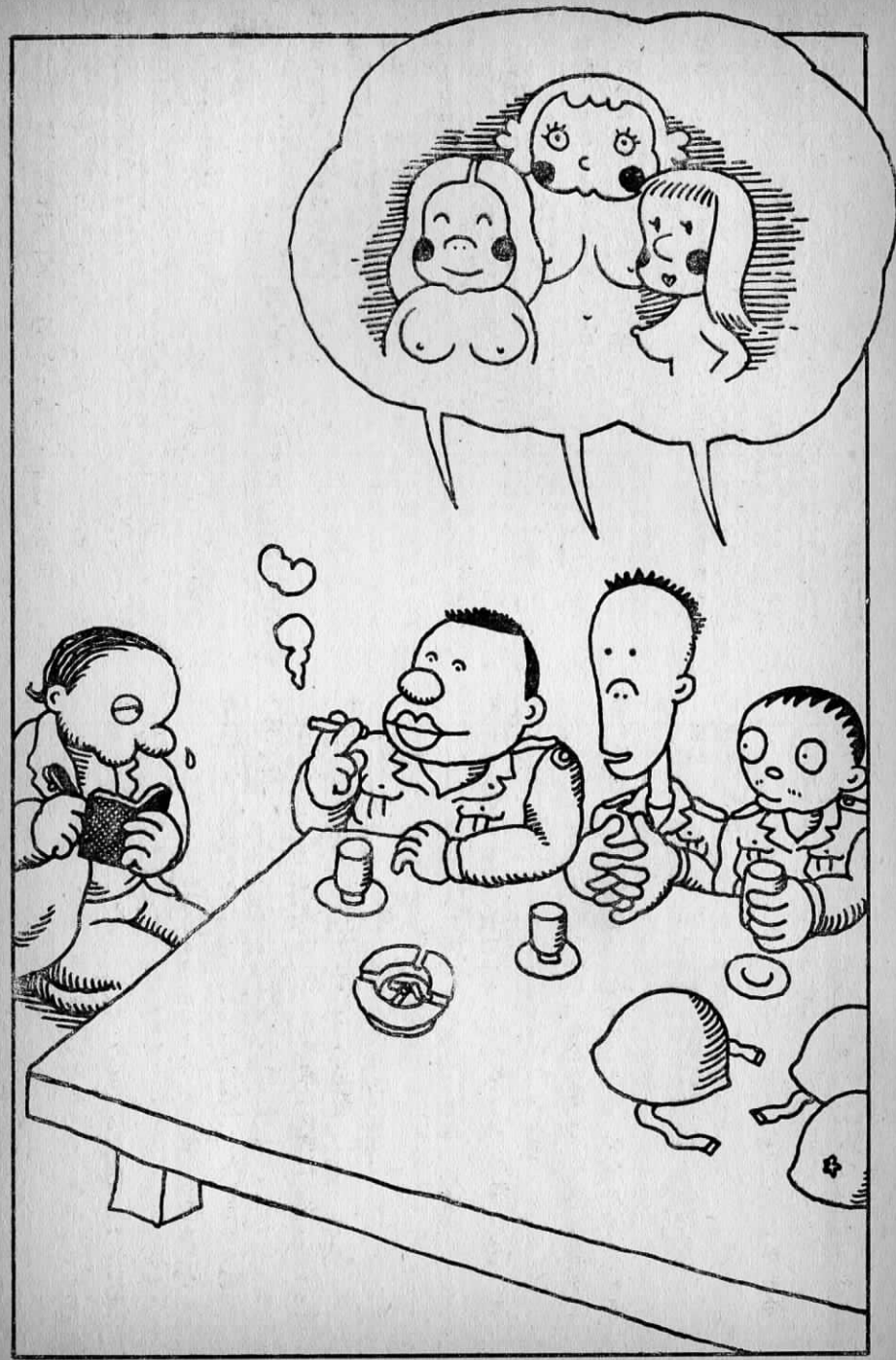
——はあ、それは心優しい事ですなあ。それで自衛隊生活の感想は？ こう言うてはなんです、辛かったことも多かったでしょう？

柴田 否、面白えがったよ、な？

加藤・柿沼 ん。

——（話の噛み合わせのいらいらしながら）し、しかし中隊の先任陸曹あたりに意地の悪いのが多いでしょう？

柴田 否、みんな人の善え小父あんなばっかだったよ。それ



に先任陸曹ぐれえになつと給料もええがら、みんなにこに
仏さまみてえだつたっちゃ、な？

加藤・柿沼 ンだんだ。

—— それにしても演習などは辛かったと思ひますが。

柴田 あげなものの観光旅行っしや、な？

加藤・柿沼 ンだんだ。

—— 待つてくたさい。完全武装して匍匐前進、というよ
うな訓練はあつたんでしやう？

柴田 そりやあつたすよ。

—— これは辛いはずですが。

柴田 辛えどきは草の上さ寐っころがって草笛ばピーコロ
ピーコロ吹くのす。

加藤 おら、草の上で昼寐っしや。

柿沼 おらバツタば見つけて相撲ば取らしえて遊んでたす。

—— バツタの居ないときだつてあるはずです！

柿沼 そんな時は蛙や蟻ンこ。

—— (頭を掻き筆を)……將軍の自衛隊時代の認識番号を
お教えくたさいますかな。

柴田 G一五六四四六。おらこの番号ば人殺ししるど憶
えてたす。

加藤 おれはG一八三七四〇。人は皆死ねと読み替えつ
と憶え易えのっしや。

柿沼 おれのはG一八三七五三。つまり人は皆ゴミっし
やね。

—— なるほど。ところで故郷吉里吉里村の独立をいつど
こで知りました？

柴田 三カ月前に山形県神町で。

—— どうやって知つたのですかな？

加藤 休みの日におよねちやとおさとちやとおふみちやが
はるるるの面会に来たのっしや。んで三対三で喫茶店さ入つた
ら、じつはかくかくすかずかだと教しえて貰つたん。

—— お悩みになつたことではしやうな？

柴田・加藤・柿沼 へ？

—— 祖国日本に対する忠誠心と故郷への愛郷心、この二
つの觀念の板挟みになつてさぞやお苦しみになつたでしやう。
つまり、あなたがたは自衛隊員として日本の独立を脅やかす
ものと戦わねばならない。しかも同時に、吉里吉里出身者と
しては吉里吉里の独立を妨げる日本国とも戦わねばならない。
これは大変な矛盾です。いや、お察ししますぞ。

柴田 ちつとも苦し無がつたっちゃ。故郷さ帰ろう言う
事がすぐその場で決まつたっちゃ。な？

加藤・柿沼 ん。

—— ほう！ すると国へつくか村につくかという互に相
反する二個の命題をどう止揚、つまりアウフヘーベンされた

のですかな？

柴田 ショーペンするより簡単なことでねえすか。およね
さがおらの嫁っこさなる言うがら二つ返事で故郷さ帰る事
にすたのす。

加藤 おれもおさとちやさ惹かれてなつす。

柿沼 おれも右さ同じすよ。おふみさがおれの子は生して
くれる言うがら一も二もなく三四と首っこ縦に振つたのっし
や。

—— (小声で) これでいいのだらうか。こんなことで独占
会見記になるだらうか。

およね (湯上りの上気した顔で入つてきて) あらあ、まだイ
ンタビューばやってんの？

おさと (湯上り化粧に用いた白粉の匂いをぶんぶんさせながら
入つてきて) さ、早くインタビューば切り上げて風呂さ入つ
て来て呉で。

おふみ (湯上りの桜色の肌を手拭で拭きながら入つてきて) 風
呂さ行つたらすぐ上つて戻つて来て呉でね。冷えたビール
とあだす達が首ば長くして待つてんだがらね。

—— 待つてくたさい、三將軍！ まだインタビューは終
つておらんのですから。戦車爆破は、そのとき、つまり三カ
月前に神町の喫茶店で決めたのですか？

柴田 まあ、そういう事。

—— (小声で) 六一式戦車を爆破せしめた原動力がこの三
人の小娘だつたとは『旅と歴史』向きではないな。『週刊ポ
スト』か『平凡パンチ』の線だぞ。

柴田 加藤に柿沼、ほんじゃひと風呂浴びてくつべぐわ。

加藤・柿沼 ん、そうすつべぐわ。

—— もうひとつお尋ねしたい。

柴田 なんだべす？

—— あ、あなたがたの関係だが、三カ月前の神町でもう
やつていたんですかな？

三人娘 ンま、嫌やらすい！

—— (坐り直して) いや立ち入つたことをお訊きしてすま
んでした。作家としては今の質問をどうしてもしたかつたの
だ。まあしかし、腹を立てられたところをみると身体の関係
はまだないようだな。

およね なに言つてんだべはア、この人。神町までわざわざ
ざ出はつて行つてなにも生娘の儘で帰つてくるごだ無えべす
た！ な？

おさと・おふみ ンだ！ (と、古橋を再び突き飛ばす)

—— (何か訊かなければ、と焦りつつ坐り直し) そのときの、
つまり初体験の感想は？

佐藤 (もう黙つていられず凄じ見舞) 『旅と歴史』は女性週
刊誌じゃないんですぜ！ (と、突き飛ばそうとするが上さすが

弾ではなかった。白いものは空中で幾百幾千の白い花瓣となつて散つた。同じように黒いものも中空でばらばらになつた。どうやら白いものは、ピラだつたようである。黒いものの正体はわからないが、ひとつひとつが煙草の箱ぐらゐの大ききで、ピラがまだ宙にひらひらとただよっているあいだに、早くも通りや町屋の屋根の上にぼんぼんと軽やかな音をたてて落ちた。

落下してきたものはどうやら危険物ではないらしい、と見てとつたのか、あちこちの家の中からかなりの数の吉里吉里人たちが通りに姿を現わした。それぞれ道路に降つた固形物を眺め、思索している。

「おばちゃ！ 迎賓閣のおばちゃ！」

柴田將軍が窓の真下に立つて固形物を眺めて首をひねっている迎賓閣の女支配人に声をかけた。

「なんだべ、そりゃあ？」

「うーん、煙草の様だよ」

と女支配人は下から答えた。

「煙草？」

「んだ。ピースの箱だつちや。だどもデザインがちよびつと違ふようだよ」

「普段のピースは鳩が木の枝ば啜えて居つとも、このピース

は鳩が菊の御紋章ば背中さ背負て居るんだつちや」

「菊の御紋章だ言うのが？」

「んだ」

「んだばそりゃ日本国王の下されもんでねえのすか？ ほれ昔の恩賜の煙草よ。内部ば開けてみさいよ」

「どかん！ と来ねべぐわ？」

「来ねべ、そりゃ無えべ。天皇の名前と天皇一家の家紋ば騙つて爆弾仕掛けるほどの度胸は、日本政府のお偉方には無かんべす。おれが責任ば持つがら内部ば開けてみさい」

女支配人は菊の御紋章を刷つたピースの箱を、犬の糞を始末するような手つきで、おっかなびっくり持ち上げた。そして、三秒に一耗ぐらゐの割合でゆっくりと内部を外に押し出した。それから慎重に銀紙を剝いで行つた。

「あだあ！ あんだの言つた通りだつちや。内部は煙草だよ」

女支配人は中身を一本抜いて鼻に近づけた。

「間違え無。これ真正銘のピースだつちや。横さ番号も刷つて在つと」

「何と刷つて在んべ？」

女支配人は一字ずつ区切つて番号を読みあげた。

「一〇〇〇一六一一〇す」

佐藤がポケットから抜き出した手帖に素早く番号を書き留

め、それを古橋の前に差し出した。

「先生、この番号には何か特別な意味があるでしようかね」

「そ、そりゃあるだろう」

古橋は手帖の数字を覗みつけた。

「いやしくも菊の御紋章入りの煙草だ。出鱈目な数字を並べるわけはない」

覗みつけているうちに古橋の脳裏にある思いつきが閃いた。古橋は数字の行列に三つ点を打つた。

「佐藤君、一〇・〇〇・一六一・一〇と分けてみたのだが、これでもきみは意味が汲みとれないかね？」

「さ、さあ……」

「ではわしが解説してみよう。冒頭の『一〇』は英語読みにする。英語で一〇は？」

「テン、ですな」

「うむ。次の『〇〇』は零と零が重つても答は零。零すなわち無じゃ。無は英語で『ノー』だよ。冒頭とつなげれば……」

「テンノー、ですな」

「そう。『一六一・一〇』は易しい。ピロピトと読めばいいだろう」

「なるほど！ それにしてもこんなことを思いつくとは宮内庁もわりと幼稚だなあ」

「いやいや、幼稚なのではない。宮内庁は暇なのだろうよ」

古橋が煙草の番号の謎を解説し終つたころ、ようやくピラ群が地面に到着した。そのなかの一枚がふわりと窓から座敷に滑り込んできた。

古橋はそのピラを拾い上げようとして思わず手をとめた。不意に嵐のような爆音が起つたからである。

「またヘリコプターだつちや！」

柴田將軍が左方の空を指して叫んだ。

「こんだあ、十機だ！」

三將軍の肩越しにヘリコプターの編隊がぐんぐんこっちへ近づいてくるのが見えた。ヘリコプター編隊は真ッ赤な煙を十本引っぱっていた。

(あの、赤い煙はなんなのだ?)

古橋は躰の芯の方からひろがってくる顫えを抑えながらこう呟いた。

(第五章・未完)